令和四年度　奈良県知事賞

「あたりまえの日常」を守るために

五條市立五條東中学校　三年　前田　篤彦

「税金」は私たち国民一人一人にとって必要不可欠なモノである。

僕のような中学生の学びも税金によって支えられている。僕の住む奈良県では令和三年度の予算のうち 20%にもなる 1075 億円ものお金が教育費として使われているそうだ。

この他にも警察費や医療政策費など、個人や企業などの民間の力だけでは守っていくのが難しい僕たちの「あたりまえの日常」を守っていくために税金は様々なところで使われている。

しかし、このような大切な税金も大きな問題を抱えている。それは長年にわたって続いている財政赤字である。現在の日本では国債や県債などを国や都道府県等が発行することで借金をして歳出を賄っている。その借金がなんと 1200 兆円を超えるまでにふくらんでしまっているのだ。国民一人あたりにしても 1000 万円を超える額だそうだ。僕のような中学生にはあまり想像できないが、人ごとだとは言ってはいられない。今、国が背負っている借金は将来僕たちが返していかなければならないからだ。

僕は、もうすでに財政赤字による国債や県債の発行が「あたりまえの日常」を守るために使える税金の額を大きく減らしているように思う。国債で借りたお金を返すときには利子を付けて返済しないといけない。この利子を返すだけでも令和四年には、歳出の８％近くにもなる８兆円以上の税金が使われている。

国債を発行して歳入を賄うことは歳出の増え続ける日本においては確かに必要なことである。国際を発行しなければ財政が立ちゆかなくなり、必要な行政サービスが提供できなくなってしまうかもしれないことも事実だろう。

しかしながら、僕は少しずつでも財政赤字や国債の発行額を減らすことができるように方法を考えて努力しなければならないのだと思う。そのためには僕たち国民一人一人が、国債を発行するということは「損」をすることだと自覚して、税金や財政に対してもっと強い関心を持つべきなのだ。

仮に令和四年度と同じ額の利払いを 10 年間続けるとすると約 80 兆円もの税金が必要になる。これだけの額の税金が必要とはいえ、もったいない使われ方をされてしまう可能性があるのだ。

これまで、税金は僕たちの「あたりまえの日常」を支え続けてきた。しかし近年の少子高齢化やコロナ渦などの影響により、苦しい財政状況が続いている。国債残高も増え続けている。このままでは今までの「あたりまえの日常」が維持できなくなってしまうかもしれない。

だからこそ、今一度僕たちを支え続けている税金と財政について強い関心をよせて、将来のためにも様々な問題を解決するために努力することが必要とされているのだと思う。